

## イエスの教える「お金」の使い方

(ルカ一六・一〜一三)

七〇を待たずに逝去した父。少々自嘲気味に自らを「巳年の鬼」と呼んだ。誕生日が節分であることを意識してのことだと思いが確かに彼はコワカッタ。そんな彼の誕生日を一日前に控えた金曜日、彼の口癖を思い出した。「金にはうるさくあれ、しかし汚いのは駄目だよ」である。「何だ、宗教者が金かよ」と思う方もおるかもしれない。しかし宗教者としてこの世で生きていくのだから金と離れて生きていくことは出来ない。無人島に住み、鳥や獣に説教をすれば可能なかもしれないが、それでは宣教にはならない。閑話休題。今朝も先週に続いてイエスのたとえ話を解き明かしたいと思うのだが、この「不正な管理人のたとえ」は難解なことで知られる個所である。お金をくすねられていただけでなく、証文の書き換えまでして自己保身を図る人間がどうして称賛されるのかという問いが自然に出てくるからである。しかしよくよく読んでいけば、このたとえ話はユーモアと共に重要な教訓を主の弟子たちである私たちに教えている。

### 一、金は「人」に使え

このたとえ話は主人が財産の管理をしている使用人が財産を乱費しているという訴えを聞いたことに始まる。注意すべきは「乱費」と訳されたことばである。これはもともとは「まき散らす」と言った意味であり、転じて「乱費」となったという。興味深いのはこの言葉は放蕩息子のとえでも用いられ、そこでは「湯水のように、使ってしまった」と訳されている。こうしたことから考えるとこの管理人、恐らくは主人の金をくすねては遊興に散財していたと思われる。だが誰かのタレこみによって彼は絶体絶命の危機に陥る。真実を話せば間違いなくクビ、おまけにこの男ソロバンより重いものを持ったことがないときた。その時、あるひらめきが彼の人生を変えた。彼は主人に債務のある者たちを呼び出し、その証文を彼らに書き換えさせ、恩を売ったのである。そして、なんと主人はそのやり方をほめた。何故か？遊興に散財するのも、証文を書き換えさせるのも主人の財産を減じさせるといふ点では何も変わらない。しかし主人は管理人の変化に気がついたのだ。以前は高級な着物に履物、山海の珍味に化けていた金は、今や人と人をつなぐ道具として用いられるようになったのだ。そう彼は糸目

をつけずに金を人に使った。主人はそこに目を付けたのだ。

### 二、この世の小事に忠実に

しかし九節のことばはなお読者を困惑させる。「不正の富で、自分のために友をつくりなさい」とはどういうことか。イエスは私たちに違法すれすれの、いや完全に「アウト！」なやり方で金を儲け、それを元手に交友関係を広げることが勧められているのだろうか。勿論そうではない。実はこの「不正の富」と訳される言葉はイエスが話されたであろうアラム語などのセム語的な慣用語であり、「(神なき)この世の富」と言った意味であろうと学者たちは指摘している。そう解釈すれば八節にある「この世の子ら」ということばとの連結も非常にスムーズになる。このたとえを通し、イエスは弟子たちにこの世における賢いお金の使い方について、またそれが示すことを教えておられるのだ。なるほど永遠のいのちに比べれば金は小事だ。しかし金はこの世では最強。その使い方に關して忠実でないものがどうしてみ国を継ぐことが出来るだろうか。イエスは問いかけるのである。更に言うならば、イエスが、また神が喜ぶ金銭の使い方はこのたとえの管理人のように遊興にふけて散

財することでも、パリサイ人たちのように金自体を愛したりすることでも(一六節参照)、はたまたザアカイのように拝金の果てに孤独になったりすることでもなく、豊かな人間関係を構築するために使うことに他ならないのである。

\* \* \*

一八日に行われる教会総会に先立つて、本日教会では監査が行われる。ペテル教会では会計担当者がさまざまな労を担っており、収支は毎月報告され、領収書もすべて月ごとにまとめられている。信徒の兄弟がみ国の拡大のために捧げたものを忠実に管理しているかが、定期的にチェックされているのだ。また役員会でも毎月収支報告を精査し、金銭が伝道や宣教といった人をつなぎ、結び合わせるために用いられているかについて吟味を続けている。素晴らしいことである。このようにすることによってはじめて教会は永遠のいのちに至る、まことの富、イエスキリストを任されるのだから。かのジョン・ウエスレーは「まじめに働いて富をつくり、出来る限り節約し、出来る限りそれを神と人とのために用いなさい」と勧めたというが、私たちも富の神マモンを愛するのではなく、富を役立つ形で用い、神にも人にも喜ばれるものになりたい。アーメン。